

佳作

頭の中のわたし

鹿児島県 霧島市立国分南小学校二年 重村 優朱奈

わたしは、じぶんがどんな人に見えているのか知りたくて、さいきんよくおかあさんに、

「わたしってどんな人。」

と聞きます。おかあさんがいろいろこたえてくれて、なんとなくわかったような気もしたけど、じぶんでは思っていないことも言われて、じぶんを知るのには、かんたんなようでむずかしいと思います。ほんとうは、ほかの人にも聞いてみたいけど、はずかしくて聞けません。みんなは、わたしのことをどんなふうに思っているんだろうと考えていると、知りたい気もちがどんどんふくらんでいきます。

そんな時、

「ゆずなは、じぶんについてよく考えるみたいだから、この本を読んでみて。」

とおかあさんにすすめられて『ぼくのニセモノをつ

くるには』という本を読みました。この本は、しゅくだいやおてつだいなど、やりたくないことがたくさんあるボクがしゅん公です。ボクはロボットを買って、ボクのにせものをつくることを思いつきます。ボクはロボットをボクのにせものにするために、じぶんのことをいろいろ教えていきます。たとえば、名前や家ぞく、外見、すきなもの、できることやできないこと、やく目や気もちなどです。ひとつひとつ教えていっても、ロボットはなかなか分かってくれません。その本を読んで、じぶんのことをぜんぶ分かってもらうのは、こんなにむずかしいことなんだなとびっくりしました。そして、こうやって、じぶんのことを考えることもたのしいなと思いました。本には、みんなから見たボクのことも書いてありました。じぶんから見たボク、友だちやおかあさんや先生から見たボクなども書いてありました。そして、みんなの頭の中には、ひとりひとり、ちがうわたしがいるんだなと気づきました。お父さんからはおこられることもあるから、よくきょうだいとけんかをするお姉ちゃんだと思われるかもしれないせん。おともだちからはおりがみをおってほしいとたのまれることもあるので、おりがみができてうらや

ましいなと思われているかもしれません。みんなの中には、いろんなわたしがいるのだなと思うとふしぎです。

じぶんのことは、まだうまくせつめいできないけど、わたしは、一人しかいないんだなと思えて、じぶんのことをもっともつとすきになってきました。

これから、わたしはみんなから、やさしい人やたのしい人と言われるといいなと思いました。みんなの頭の中のわたしがそんな人になれるように、いつもニコニコとやさしいわたしでいたいです。